

日高夫妻にとって、楽しい思い出の多くは、一九七〇年代のはじめ、パリ郊外ドラヴェイユの高級住宅地パリ・ジャルダンに購入した、大きな家での日々にあるようだ。追って事情は述べることになるだろう。一九七四年から、およそ一五年間、夫妻はその家に戻って暮らすことをフランス政府から拒まれていた。にもかかわらず、二人はこの家を手放すことなく日本で過ごした。いつか、また、その家に戻ろうということが、夫妻のあいだの默契だった。いや、こうした暢子さんの望みをかなえることが、六郎先生にとっても喜びだったと、言うべきなのかもしれない。一九八九年、再び夫妻はパリ郊外のその家で暮らします。以来、たびたび私にも、フランスへ遊びに行くようにと、誘いの声をかけてくださった。だが、一度も実行に移すことなく過ごしてしまった。結局、私は、そこを訪ねていく理由を自分に見出しかねていたということか。

時間をもっと遡ろう。日高夫妻が、そもそもフランスに住まいを求めると至った経緯は、こういうことらしい。

一九六〇年代後半、ベトナム戦争の下で、夫妻は、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の関係者らによる脱走米兵援助の運動に協力していた。当初は、本当に

脱走してくる兵士らがいるのかどうかも確信がないまま、在日米軍基地の周囲で、脱走を呼びかけるピラマキなどを続けていたのだが、六七年（昭和四二）晩秋、横須賀に寄港中の米航空母艦「イントレピッド号」から、ついに初めて、四人の水兵が脱走してきた。これを皮切りに、脱走米兵たちは、次つぎと彼らの前に現われた。日高夫妻は、六九年の年末から、鎌倉の自宅でクリス、さらにウィリー（ともに当時の仮名）という若い脱走米兵を匿^{かくま}う。やがて、彼らには偽造パスポートが手渡され、それぞれが、秘密裏にフランスへ向けて出国していった。

しばらくして、日高夫妻は、パリでの彼ら脱走米兵の暮らしぶりを見に行ってみようと思った。東大に提出していた日高先生の辞表がやっと受理され、「自由の身」となって浮き立つ心も、これを手伝っていただろう。一九七二年（昭和四六）夏ごろのことである。

パリでホテル住まいしながら、脱走米兵たちとの再会を果たした。さらにアパルトマンを借り、彼らと共同生活もした。

そうするうちに、日本の岩波書店、福音館書店、筑摩書房、平凡社、講談社などの出版社のあいだで、パリに日本語書籍の書店を開こうという話が持ちあがる。旧知の岩波書店社長、岩波雄二郎からこの話を聞かされて、一番熱中したのは、暢子

さんだったようだ。書庫を建てる広い庭を備えた、大きな家があればいい、という話も出る。書店には、レストランを併設すればいいんじゃないか、とも、話はさらに膨らんだ。おりよく、パリ・ジャルダンに、それになつた邸宅が見つかる。日高夫妻は、鎌倉の自宅を処分して、その家を手に入れ、フランスに移り住むことにした。

こうした経緯のたどりかたは、日高夫妻の大胆、というより、とっぴなところで、幾度聞いても、私にはわかりにくい。パリに日本語書籍の書店を開くという件に關しても、そうである。日高先生は、その本屋の親爺さんに収まるつもりだったのか？ あるいは、暢子夫人が毎日ソロバンをはじいて、本屋のおばさんに？ しかし、どうやら、そこまでの覚悟があつたわけではないらしい。日高先生自身は、日本と往復しながら知識人としての活動を続けて、パリ・ジャルダンの居宅では書きもの中心の生活を送るつもりでいたようだ。暢子さんは、快活な若者たちを周囲に集めて、自身はマダムとして彼らの世話を焼くつもりでいたのだろう。

ともあれ、これが一九七三年。オイル・ショックの年である。日本の出版社も、出費のかさむ余分な事業からは手を引くほかない事態を迎えていた。にもかかわらず、日高夫妻は、そのままフランス移住を敢行する。パリ・ジャルダンの邸宅には、

旧知の脱走米兵たち、日本からの若い知人たち、さらに、ヨーロッパに駐留するNATO米軍からの新たな脱走兵らも寝起きして、改装や修理を手伝った。一方、翌七四年には、日本からフランスに渡っていた脱走兵クリスとウィリーが、それぞれ米國へと戻っていく。

日高先生は、こう語る。

「あのときはね、パリにいた海老坂氏（海老坂武、フランス文学者）とか、ヨヨ（塩沢由典、数理経済学者）とか、若くて優秀な研究者たちが、もう大学での仕事はやめて、こつちを手伝いたいと本気で言っていたんだ」

たしかに、素敵なことには違いない。だが、当の日高夫妻には、自分たち二人だけで、やれることを小ぢんまりと実行する——といった発想はない。それだけに、いざれ若者たちがいなくなってしまうえば、すべて絵に描いた餅、といったことにもなりかねない。

海老坂武氏は、当時のことを回想し、このように書いている。

「日高暢子の夢は、本屋兼レストランをパリに開き、やがては日仏文化センターのようなコミュニケーション・スペースを作ることだった。手始めに日本の観光客向けに弁当を作ったらどうか、というアイデアを誰かが出して、このアイデア

がだんだんと膨らんでいったのだろう。資金は彼女が日本から集めてくる。日高家に出入りしている若者たち、日本に帰りたくないことでは共通しているモラトリアムの若者たちがその手となり足となる。日本からも、サラリーマン生活に嫌気のさしている若者たちがかけつけてくるだろう。レストランがうまくゆけば五、六人は食っていけるかもしれない……。

私も日高家に出入りしているうちに、日高暢子の夢、若者たちの夢に少しづつ感染していった。一橋での教師生活は面白くなく、ポストはいつ捨てたつて惜しくはない、パリで弁当屋をしながら小説を書くというのも悪くないではないか……。そう思いながら、だんだんと彼女らの計画にコミットしていった。そして帰国後も連絡を取りあっていた。もともとこの話を七四年一月に鈴木道彦にしたら、素人ばかりのレストランが企業としてはたして成り立つのかどうかを危惧し、さらに、そこに私が加わることに積極的な意味がない、と反対された。たしかに私は、そこに積極的な意味を求めるといふよりも、日本で大学教師をやっていることから逃げたい、という気持ちの方が強かったのである。」(海老坂武『祖国より一人の友を』岩波書店、二〇〇七年)

その七四年夏、海老坂がパリを再訪すると、日高家を中心に、計画は少しずつ進

行し、市内のサン・タンヌ通りに二〇万フランで売りに出されているレストランの権利を買うか買わないか、という段階に至っていた。結局、その街区はオフィス街なので、昼はにぎやかでいいけれど、夜は閑散としてレストラン経営には難しそうだと、契約は見合わせた。だが、それにも増して、不安要素は自分たちの側にあった。「——いったい誰が支配人になるのか、名義だけであれそれはフランス人でなくてはならなかった。また誰が料理人になるのか、誰が会計の責任者になるのか、労働許可証がとれる見通しはあるのか。こういうことがほとんど詰められていなかったのである。」(同前)

そして、この秋口にさしかかった、ある日のこと——。

海老坂武のパリの宿舎に、日高家で書生役として住み込んでいた青年がやってきて、「暢子さんが警察に逮捕された」と知らせる。六郎先生は、日本に戻っていて、留守だった。暢子夫人にかかった嫌疑は、ヨーロッパで活動する急進派組織、日本赤軍の動向と関連するようだが、詳しくはわからなかった。日高家に出入りする若者たちにも、パリ警察から事情を聴かれる者がいるようだった。やがて、暢子夫人は、留置場に四泊五日つなぎ留められたのちに、嫌疑が晴れたと告げられ、釈放されてくる。

容疑とされていたのは、おおよそ、こんなことらしい。

——ある日、家に出入りする若者の一人から、部屋のひとつを集まりのために使わせてほしいと求められ、彼女は承諾した。その集まりに来た者が、日本赤軍のメンバーだった——というような筋立てである。

だが、暢子夫人自身は、その集まりに来た誰とも接触していなかった。つまり、急進グループの活動を幫助していた事実はない、というのが警察側の結論だった。

釈放された暢子夫人は、夫・六郎氏がいる日本へ向けて出国する。だが、これ以後、一九八九年に至る一五年間、フランス政府は夫妻に長期滞在のヴィザを発給しなかった。やむなく、パリ郊外の自宅をそのままに残して、日高夫妻は、当面の住まいをやがて京都に移す。鶴見俊輔氏からの勧めで、六郎先生は京都精華短大で教えることに決心したからだった。

少年から青年に移りつつあるころ、京都育ちの私が、一九八〇年、初めて日高先生を訪ねていくことになるのも、こうした経緯があつてのことだった。

だが、パリで暢子さんが日本赤軍との接触を疑われた問題は、これだけで終わらなかった。再度、不愉快な問題が持ちあがるのは、パリ警察による彼女の逮捕・釈放から、ほぼ七年を経て、一九八一年になつてのことだった。

日高先生は、この年、オーストラリア・メルボルンのラ・トロップ大学とモナッシュ大学から招待を受け、一月から一〇月までの予定で、客員教授として暢子さんとともに現地に夫妻で滞在する手はずになつていた。だが、出発間際になつて、オーストラリア当局は、入国のためのヴィザ発給を二人に対して拒んだのだ。理由を問い合わせたところ、駐日オーストラリア大使館の担当官は、「(日高夫妻の)日本赤軍との関係が疑われている」むねを答えた。フランスからもたらされた「治安情報」によるものらしかった。

こうしたオーストラリア保守党政権の措置は不当な決定であるとして、メルボルンの大学関係者、現地のマスメディア、また日本側の知識人らによる抗議の働きかけが始まり、長く続いた。やがて、この主張は労働党によるオーストラリア新政権に受け入れられて、八三年秋、日高先生は同国に入国し、メルボルンのラ・トロップ大学、モナッシュ大学で、当初予定より二年半遅れの講義を行なつた。

ただし、フランスでの長期滞在のヴィザ発給には、それからもさらに長い時間を要した。やっとその要求が受け入れられ、日高夫妻がパリ・ジャルダンの自宅での暮らしに戻るのには、一九八九年。パリ警察による暢子さんの逮捕から、ここに至るまでの一五年間が、「日高夫妻事件」の顛末だった。